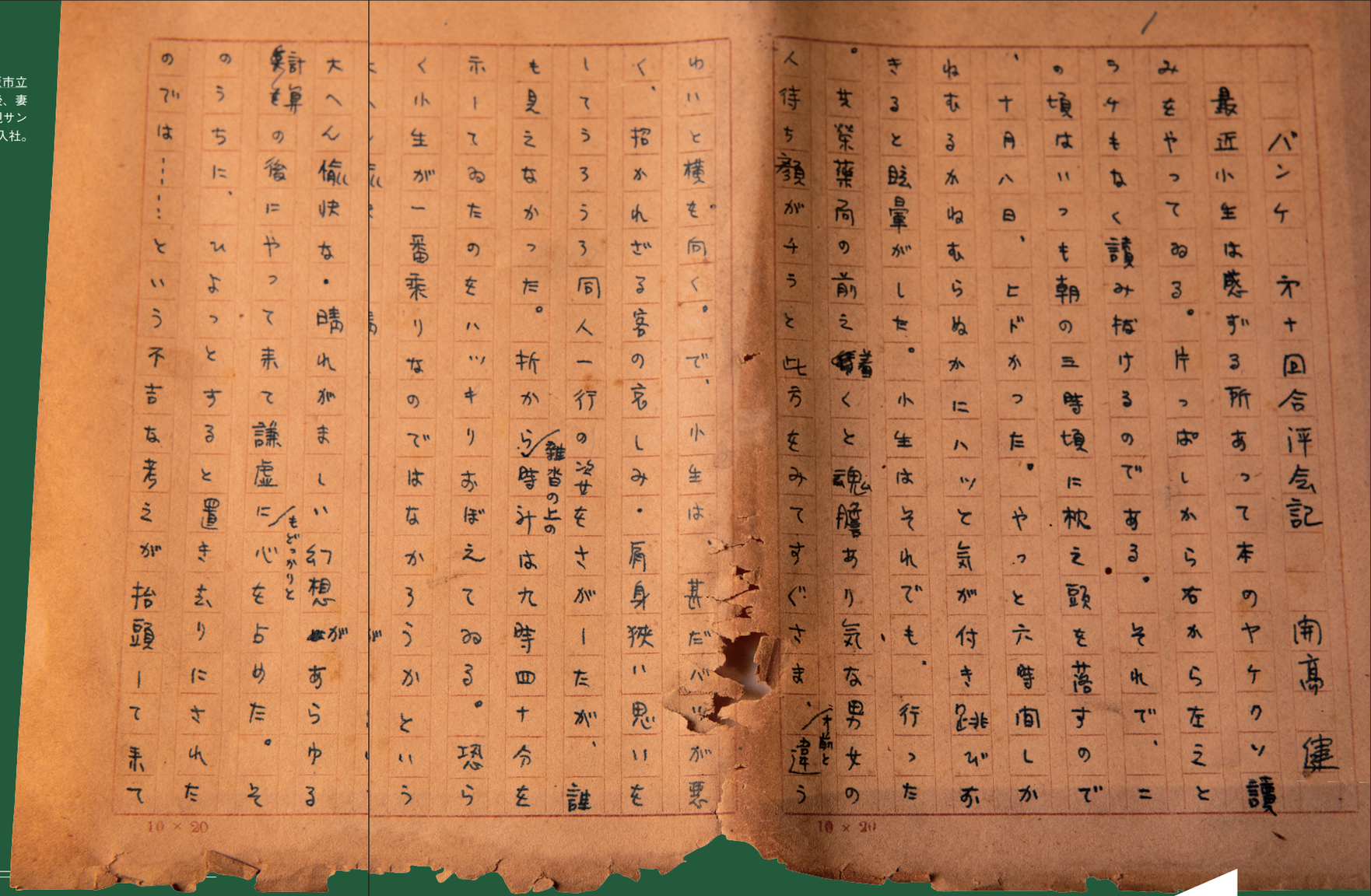

Part 1

今、エッセイとは何か？

**小説や詩といった創作とも違う、リアルな手触りはありつつ
ノンフィクション、ルポルタージュやドキュメンタリーにように硬質ではない。
エッセイと呼ばれるその文章はいつもわれわれのそばにあり愉しませ、
導いてくれる。今、その楽しみについて考えてみたい。**

開高健は1930年、大阪市生まれ。大阪市立大学在学中に洋書輸入商に入社。その後、妻で詩人の牧羊子が育児のため「壽屋（現サントリー）」を退社する際、後任者として入社。

開高健の原点

取材・文＝kotoba編集部
撮影＝丸谷嘉長　協力＝公益財団法人開高記念会

エッセイを考えるとき、作家、開高健に名前が思い浮かぶ。小説、ノンフィクション、そしてエッセイ、それらのすべてを自家薬籠中のものとし、自由自在に行き来した存在。エッセイは食や酒、旅、釣りなどをテーマにしたものが多いが、ここで紹介するのは、作家が大阪時代に参加していた同人誌「えんぴつ」に掲載された文章。そのときの思いや印象を綴った文章はエッセイと呼びたい。ここに開高健の作家としての原点があるように思う。

（21ページまで、写真は原稿の複写、下段は当該する文章）

この続きは本誌でどうぞ！

バンケ『えんぴつ』第十回合評会記

最近小生は感ずる所あって本のヤケクソ読みをやっている。片っぱしから右から左へとラチもなく読み抜けるのである。それで、この頃はいつも朝の三時頃に枕へ頭を落すので、十月八日、ヒドかった。やっと六時間しかねむるかねむらぬかにハッと気が付き跳びおきると眩暈がした。小生はそれでも、行った。共榮藥局の前へ着くと魂膽あり気な男女の人待ち顔がチラと此方をみてすぐさま、オ前と違うわいと横を向く。で、小生は、甚だバツが悪く、招かれざる客の哀しみ・肩身狭い思いをしてうろうろ同人一行の姿をさがしたが、誰も見えなかった。折から雑沓の上の時計は九時四十分を示してゐたのをハッキリおぼえている。恐らく小生が一番乗りなのではなかろうかという大へん愉快な・晴れがましい幻想があらゆる計算の後にやって来て謙虚にもどっかりと心を占めた。そのうちに、ひょっとすると置き去りにされたのでは……という不吉な考えが擡頭して来て